

『文藝』の最新号(二〇一三年冬号)から連載の始まった田中康夫の久々の小説「33年後のなんとなく、クリスタル」が話題を呼んでいない(新聞などの文芸時評でも取り上げられていない)のは意外だ。少なくとも私は面白く読んだ(続きが楽しみだ)。

面白かった理由の一つはこの作品が私小説であることだ(田中康夫は流行に敏感な人だから最近私小説がちよっとしたブームであることを踏まえた「私小説風」なのかもしれない)。

昭和五十五(一九八〇)年の文藝賞受賞作だった『なんとなく、クリスタル』(一九八一年刊)は青山学院大学に通いモデル事務所にも所属す

る由利の日常を描いた青春小説(といってもそれまで青春小説と思われていた定型をこわした青春小説)だ。「33年後のなんとなく、クリスタル」はその由利と作家で最近まで政治家でもあった

文庫本を狙え!

779

河出文庫 760円+税

新装版『なんとなく、クリスタル』

田中康夫著



坪内祐三

ね。……日本人

全体がそうなのかな」の註。

〈この小説の登場人物はマネキン人形で、中身が空洞だ、という

「僕」が偶然再会した所から物語が始まる。そしてこの作品に合わせて(?)『なんとなく、クリスタル』が文庫化された(三十年前に河出で文庫化されたのち新潮文庫に移りそれが河出文

庫に戻ったわけだ)。

当時私はまさに大学生だったけれど少しもクリスタルな若者ではなかったからこの小説にピンとこなかった(やはり大学生だった私の弟ははまっていたようだが)。しかし

「今時のパープリンな若者」であるとして先行世代に叩かれたけれど、実は「註」の中のものとしての舌鋒が含まれていることを今回知った。例えば249「ブランドに弱いんだよ

話題を呼んだ註は面白いと思つた(今初めて読む読者に當時その註が文学シーンに与えたクリティカルな衝撃が伝わるだろうか)。この小説がベストセラーになって行く頃、田中康夫は

う「文芸」評論家だつて、学歴や肩書きというブランドにこだわる人です。この小説には生活がない、という「文芸」記者だつて、新聞社のパッチというブランドを取りはずしたら、タダの人です」

文藝賞受賞(『文藝』一九八〇年十二月号)の段階で註は話題を呼んだが、単行本化に際してそれが増補された。つまりこの部分は、「なんとなく、クリスタル」批判への反論なのだ。それから、「テイク・アウトのみのケーキ屋さん。値段は少し張りますが、期待は裏切られませんか」と註125にあるエルドールが由利と「僕」にとつて特別の店であることが「33年後のなんとなく、クリスタル」によつて明らかになる。ところで『なんとなく、クリスタル』のトリヴィアを一つ。この本の巻頭には著者の肖像写真が載っているが、初版と再版以降で異なっている。

つばうちゆうそう 1958年生まれ。著書に『東京タワーならこう言うぜ』(幻戯書房)、『不謹慎』(福田和也氏との共著、扶桑社)、『総理大臣になりたい』(講談社)など。本連載をまとめた『文庫本玉手箱』(文藝春秋)も好評発売中。